



奈落から操る 希代の人形芝居

300年以上伝わる とうろう 燈籠人形

中宿地区に伝わる燈籠人形は、江戸前期の明暦2・3(1656~57)年ごろ、地域の農民芸能として始まったといわれ、かつては地元神社の例祭の前後に上演されていた、口伝で継承される人形芝居です。

人形の胴体の中に回転するカンテラ(=小さいランプ)を付けて光らせ、糸で操るのが特徴です。人形は竹ひごを骨組みにして和紙を貼り、ロウで縁取りした線画に絵の具で模様を描いた衣装を上から着せます。上演のたびに、練習・本番・予備用にそれぞれ3体を新しく作るため、とても手間が掛かります。

熟練の技とチームワーク

人形には何本もの糸が取り付けられ、それを天井のかまち框に通してから下ろし、舞台床下の「奈落」にいる操り手が動かします。糸操り人形の多くは、人形の上から操り手が糸を動かすのに対し、燈籠人形のように下から操る例はほとんどなく、とても珍しいものです。

人形の操作は1人ではなく複数人で行います。いずれの演目も直接ではなく、上を見ながら間接的に行うため熟練の技術とチームワークが必要です。また、人形だけでなく背景の転換も糸で行います。

24年ぶりの復活公演

かつて、中宿の農家の長男だけが演じることを許されたという燈籠人形。幕末から明治、昭和の初めごろまでは何回か上演されていましたが、昭和4(1929)年を最後に途絶え、記録も少ないため次第に忘れられていきました。

万博や海外にも出展

昭和28年、地域の旧家で人形が見つかったのを機に、3年後には地区全戸が対象の保存会が結成され、久々に公演されました。その後、東京国立劇場や大阪万博での公演、ドイツのミュンヘン人形博物館などへの人形出展などを経て、類例のない独特な民俗芸能として昭和52年には国の重要無形民俗文化財に指定されました。しかし、後継

者不足などから平成13(2001)年の市文化センターで演じたのを最後に、本格的な公演は中断しています。

燈籠人形の「灯」は消さない

前回の公演から24年がたち、当時の様子を知る人も少なくなり、燈籠人形の伝承を危ぶむ声が大きくなってきました。中宿から燈籠人形の灯は消さない一。その思いから、保存会は人形作りや地元の祭りでのミニ公演を、少しずつ続けてきました。

そして今、中宿糸操燈籠人形保存会はいよいよ「復活」を目指し、1年以上前から毎週のように人形制作や操作の練習に取り組んできました。今回は、11月の公演に向けた保存会の活動を紹介します。

